

主日礼拝

2023年11月19日(日)

題 「天からのパン」

テキスト：ヨハネによる福音書6章22～40節

皆さま、おはようございます。

今日の聖書の個所には、イエスを探しまわってイエスの元に来た人々とイエスの会話の場面が記されています。

24: 群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。

群衆は、イエスを見つけることができず、ガリラヤ湖の北側のカファルナウムの町、村にイエスを探しに行ったのです。そこでイエスにやっと会えたのです。

そして、群衆たち湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言いました。ラビとはヘブライ語で「先生」という意味です。また聖書では「群衆」という言葉は、「飼う者のない羊の群れ」を意味すると言われていています。自分勝手にバラバラの状態を表します。また顔の見えない存在でもあります。野獣に襲われ、危機が迫るとバラバラな方向に逃げまどうのです。ちなみにヤギは群れで闘うと言われてます。

ここからイエスと、イエスの所に来た群衆との問答が起こります。

群衆はイエスの言葉を理解できないようです。

26節「イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。」と。

イエスは、「はっきり言うておく。」という言葉が使われています。

イエスが大切なことを伝える時、最初に言われる、「アーメン」という言葉です。群衆は、神さまを心から思い慕うのではなく、パンを食べて腹が満たされることを願ってイエスの所へ来ていたのです。昔、小学生の頃、「アーメン、ソーメン、冷ソーメン」と言っていたことを思い出します。

パン、食べ物を求める群衆に対してイエスは、

「27: 朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくなるしないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」「永遠の命に至る食べ物」、それは神の言葉であり、神の言葉は、神の思い、意思、その出来事のことです。神はイエスを独り子として認めておられたのです。「永遠の命に至る食べ物を求めなさい」とイエスは群衆に呼びかけられたのです。

すると群衆はイエスに質問し、イエスはそれに答えられます。

28:そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、

29:イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」と。

「神の業を行うには、何をしたらよいでしょうか」との問いに対してイエスは、「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」と答えられました。良い行いも大切ですが、まず何より大切なことは、神が遣わされた者を信じることなのです。イエスを信じるということは神さまの業なのです。

「神がお遣わしになった者を信じること」が大切なのですが、信じたいという気持ちは大切です。しかし、イエスを信じる、神さまを信じることは、わたしたち人間の力でできるのではなく、神の業、神さまが働かれてこそ、神の助け、慰めと悟しの力である聖霊によってわたしたちは、イエスを神から遣わされた方として信じることができるのです。信じさせてもらえるのです。その時、心は平安に満たされて行くのです。イエスを信じる、神が遣わされた方として信頼する、非常に単純なことですが、根本的なこと、肝心なことです。ここが決まらないと、人間は嵐に翻弄されて流される船のようになってしまい、心も乱れてしまい、荒波の中で彷徨（さまよ）うばかりになってしまいやすいのです。

イエスのことばを聞いていた群衆は言います。30節「それでは、わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。」と。

これは肉眼の目で見えることだけを信じる姿勢です。旧約聖書にある出来事を思い出します。旧約聖書の2番目の書物である出エジプト記には、古代のイスラエル人が、指導者モーセに導かれて、それまで奴隷状態であったエジプトから脱出して、目的のカナンの地まで荒野の道を行ったことが記されています。その荒野の厳しい旅の中で、ついに食料がなくなった時に、神が行ってくださったことです。

31:わたしたちの先祖は、荒れ野でマンナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」彼らは確かに、この天からのパンによって助かったのです。

「**天からのパン**」これは今日、諸説あるようですが、一つには荒野に生息するギョリュウの木の樹液が固まったものではないかといわれます。それは白い色で、食べることができるのです。

ちなみに森永製菓には「マンナビスケット」というこども向けのお菓子があります。これはキリスト者であった森永太一郎が旧約聖書にある神が荒野をさ

まよえる民に与えたマナに因（ちな）んで名付けたと言われます。（出エジプト記16章）森永太一郎は仕事を隠退してから洲本にも講演のために来たことがあると聞きました。

聖書に戻りますと、

32:すると、イエスは言われた。「はっきり言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。

33:神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」
イエスは、マナは、モーセではなく神が与えられたのだということを力説されます。ここは大切なことです。モーセは神に用いられたのです。キリスト者の中でも、立派な働きをした人を偉人として崇めることがあります。しかし、これには気をつけなければならないのです。偶像礼拝のようにつきなりやすいからです。人間は、どんなに立派な人も弱さを持っているものです。

34:そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつもわたしたちにください」と言います。

そこにいた群衆たちは、食べ物をもらうことが重要だったのです。

それだけ日々の生活が苦しかったのだと思います。昔、テレビのドラマで少女が「同情するなら金をくれ！」と言う場面があったことを思い出します。

その気持ちも分からないわけではありません。

群衆はパンの問題に心も身体も支配されていたのかもしれない。

その思いを見抜かれたイエスは、毅然として語られました。

「35:イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。」と。わたしは、この個所から教会で行う聖餐式のことを思い出した。聖餐式にはパンとぶどう酒が用いられます。「パンと葡萄酒」は、十字架につけられたイエスの愛の血潮とイエスのからだを意味するものです。わたしたちは、聖餐式でイエスの命のパンを頂いているのです。

人がこの世を生きていくのに必要なものをイエスにご存じなのです。

肉体的に飢えることがないこと、そして心の渴くことがないことです。

イエスを神の子として受け入れて生きるということは、イエスを命のパンそのものであると信じて、イエスを信じて、イエスと共に生きるということです。それは、イエスにならって互いに愛し合い、助け合って生きるということです。

イエスこそが、「いのちのパン」であり、「永遠のいのち」そのものなのです。そのことを信じて生きて行きましょう。

